

福浦厚子 著
『都市の寺廟—シンガポールに
おける神聖空間の人類学—』

春風社
2018年、305pp.

上杉妙子

Taeko Uesugi

専修大学 文学部 / 兼任講師

本書は、1990年代から2010年代にかけて実施されたフィールド・データにもとづき、シンガポールの道教寺廟における宗教的信仰及び実践についてまとめた民族誌である。なお、本書は2016年に京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した博士論文をベースとしている。

以下、本書の構成を紹介する。「第1章 序論」では、華人の宗教やシャーマニズムなどに関する先行研究の検討をしたうえで、問題の所在を明らかにする。「第2章 調査寺廟の概要」では調査地の歴史や社会、政治などについて概要を述べる。「第3章 主席・道士・童乩」では、寺廟の宗教的信仰や実践の主要なアクターである主席と道士、童乩(シャーマン)が果たす役割について述べる。「第4章 個人・家族・寺廟」では、父権社会イデオロギーが宗教儀礼や家族にどのような影響を与えているのかを検討する(130頁)。「第5章 問神の依頼者と依頼内容」では童乩に対する相談事例を記述する。「第6章 問神での災因論」は、童乩への相談事例の分析から災因論の語り口を明らかにする。「第7章 神聖空間のポリティクス」では、検討対象を墓地に転じ、政府の政策とそれに対する人々の抵抗を記述する。

本書では、墓地政策やトランスナショナルな宗教実践など、いくつもの重要な問題提起がなされている。中でも評者の印象に残ったのは、第一に、調査寺廟に通う女性が、圧倒的な統治術(the art

of governance)を持つ国家の下で規制される寺廟において、男性アクターに従属するという、二重の劣位に置かれていることである。第二に、二重の劣位に置かれた女性たちがいかにして主体的に権力を行使しているのかということである。紙幅の都合もあるので、本書評ではこういったことに限定して論じたい。

本書によると、シンガポール政府は市民団体に対して強い規制を実施しており、その統治術の徹底していることには驚きを禁じ得ない。シンガポールではニュータウンごとに宗教施設の数定められていて、その基準に従い宗教施設は撤去されたり再建築されたりする(39、43頁)。かつては、寺廟が反植民地運動や民族運動の拠点とならないよう、都市再開発の一環と称して政府は取り壊しを進めた(44頁)。1991年から施行された宗教調和維持法により宗教法人として認定されない団体には、土地利用の更新も認可されない(73頁)。

そのため、調査寺廟も国家から好ましい存在と目されるように努めていて、地元選出の国会議員とのつながりを深めている(146頁)。また、1997年以降、民間団体に福祉支援を行わせ国家政策を補完させるべく規定が作られたため、調査寺廟も広範な人々を対象とした慈善活動に積極的に取り組むようになった(73頁)。こうした努力が功を奏して、調査寺廟は1974年に土地収用の対象から免れた(68頁)。税制上の優遇も受けている(98頁)。

国家と宗教団体のこのような関係はコーポラティズム(corporatism)的關係であると見なすことができよう。

さらに興味深いのは、以上のコーポラティズム的關係が調査寺廟における宗教的信仰及び実践に影響を与えているように見受けられることである。(シンガポールでは農業従事者は少ないが、)調査寺廟の年中行事は五穀豊穡を実現することにより、国泰民安が達成されるという考えに基づき実施されているという(63頁)。

女性たちもこうした国家協調的な宗教的実践及び信仰の影響を受けている。調査寺廟では「行事の参加主体すべてが男性に限られ、女性は信仰のための儀礼から排除され」(192頁)、従属的立場にある。相談を持ち込む女性には童乩を介して神の託宣が下されるが、託宣では「災因を他人や社会に帰する事例はみられなかった」(p.222)という。童乩は相談を持ち掛ける女性に対して、事態を受け入れ、現状肯定的に静観することを促す(151頁)。たとえば、上司からの嫌がらせに悩む女性に対しても、女性の側に我慢を強いるよう説く(151頁)。社会批判や調和的な人間関係の破壊につながりかねないような託宣は下らないのである。筆者は、「童乩がこの寺廟で問神に奉仕し、寺廟の社会的な責任や役割を担う以上は、現状を肯定しないことや、災因を当事者以外のものに求めることはできない」(222頁)と指摘する。調査寺廟が宗教調和維持法により規制されている団体であることを考えると、この指摘は妥当であると言える。寺廟の男性たちの指導に服することで、女性たちも間接的ながら国家の規制監督下に置かれることになる。

しかし、著者は一方で、寺廟に通うことで女性たちは主体的な権力行使をしているのだと主張する。

では、女性はどうのようにして権力を行使しているのだろうか。

著者は、社会的に劣位に置かれた者には、既存の秩序構造の裏でのみ作用するような類の権力を獲得する道が残されているとする、井桁碧の議論を援用する(163-164頁)。そして、女性は「童乩の『語り』を超自然的存在の『語り』として伝えることで、家族の問題や家の位牌の向きや祀り方などに影響する権力を獲得し、行使すると考えられる」(p.195)という。例えば、身体的不調を訴える娘を寺廟に連れてくる母親の事例が第4章と第5章で取り上げられている。著者はこの事例について「家庭内では妻は夫に対して劣位であるが、問神は妻から夫に対する権力関係を逆転させる機会になっている」(165頁)と指摘する。たいへん興味深い洞察である。それを証拠立てるような家族関係についての記述があるとさらによいと思う。また、この娘が「家庭内で何度か観音が憑依し、自らも童乩のようになったこともある」(161頁)からなのだろうか、著者は「男性との(性的な)関係を排除した女性の『神聖性』を保つため、母が娘の異性関係を否定的に捉え、介入しているとみなすことができる」(161頁)と解釈している。確かにその可能性はあると思う。より詳しい記述が望まれる。

宗教的職能者を選択する権限が女性に与えられていることにも、女性の主体的な権力行使が見られる。例えば、件の女性は調査寺廟の童乩に相談しても、無難に見える儀礼の実施や食物の摂取について助言を受けるのみであった(152-154頁)。それに納得が行かなかったのだろうか、彼女は一方で自宅に師傳(邪祓師)を呼ぶということもしている。そして、この師傳からは、調査寺廟の元首席の息子が娘に邪術をかけているから対抗邪術を行うようにという、まったく異なる指示を得ている(155頁、191頁)。この師傳が宗教調和維持法の規制を

受ける存在であるのかどうかは定かではないが、寺廟で納得のいく託宣が得られない場合、代替的な宗教的実践を選択することもできると見受けられる。宗教的実践を選ぶという権限も強調することにより、女性が「家庭内の全般的なマネジメントをも負う立場にあり、家族に影響する権力を獲得し、行使する際に、童乩を一つの手立てとして使っていた。」(198頁)とする著者の結論にもより説得力が増すものと思われる。

以上、本書の内容を限定的に紹介し論評してきたが、本書はそれのみに終始するものではない。優勝劣敗の原理が貫かれる社会というイメージの強いシンガポールに、誰でも出入りすることができるサードプレイスが存在し、豊かな信仰世界が展開していることはとても印象的であった。シンガポール社会の概要も手際よくまとめられているので、シンガポール社会やシャーマニズムに関心を持つ幅広い人々に本書を勧めたい。

